法藏菩薩發願の偈

願はくば我れ作佛せば　聖法王に齊しくし
生死の海を渡りては　遍ねく度脫し盡さなん
有ゆる善と波羅蜜の　願　行あまねく成就して
一切の恐懼の物のため　大いに安きを施こさん
假令無量のほとけあり　其數恒沙に過ぎにける
斯も數多のみほとけに　心つくせる供養より
一切と共にわたるべき　道をもとめて堅正に
何なる苦難を凌ぎても　却ぞかざるに如ぬなり
たとへば數へ盡されぬ　有ゆる諸佛の國々に
光明遍ねく照らしては　洹らぬ隈もなきまでに

斯くは志勇精進し
我作佛せる國ばかり
無量の寶奇妙にて
無爲泥洹の國きよく
我世の一切の衆生が
恕ひやられて哀れなる
十方より來生する人の
我國にだに到りなば
幸はくば我がみ佛よ
衆生救度ふべき願望を
十方世尊無礙の智よ
假令此身をもろ〳〵の
威神はかり難かるに
最勝第一ならしめん
道場ことに超絶し
また等雙ぶる處なけん
生死の海にしづむ身を
爭でか度はで有ぬべき
心は清よく安らけく
快樂安穩ならしめん
我眞證を證明しませ
果さ欲とて力精まなん
我心行を知ろしめせ
猛き炎の中に入り

有ゆる苦毒を受るとも
いよ〳〵勇猛精進し
衆生に代らん我行は
忍びて終に悔ぬなり

四誓の偈

我は超世の願を建つ
斯願若しも滿さずば
我は無量劫のなか
一切の貧苦を濟はずば
我れ佛道を得るときは
若も聞えぬ處あらば
雌欲と正念淨慧との
無上の道をもとめては
必らず無上道を得ん
誓ひて正覺と成ぬなり
大なる施主の身とは爲
誓ひて正覺と成ぬなり
名聲あまねく洹らなん
誓ひて正覺と成ぬなり
一切梵行修めつゝ
諸の天人師と爲らん

神力大光を演まして
三垢の冥を消除ては
彼の智慧の眼を開ては
諸ての惡道閉しては
功祚成滿いたしては
日月の光りも戢まりて
衆てに法藏開きては
常に大衆の中にして
一切る佛に供養ては
願慧まどかに成滿し
佛の無礙の智の如く
願くは我功慧の力

普ねく無際の土を照し
衆の厄難を濟はなん
此昏盲の闇を消し
善趣の門に通達なん
威を十方に耀やかし
天の光も隱れなん
功德の寶を施こさん
法を說て獅子吼せん
衆の德本具足なれ
我れ三界の雄とならん
通して照さぬ處もなく
最勝尊にひとしくし

斯願若しも尅果せば
虛空に充てる天人よ
大千應さに感動し
妙なる花を雨せかし

靈鷲の月

滅後に我を戀したひ
衆生既に信伏し
一心佛を見まほしく
渴仰の心生じなん
時に我は衆僧らと
質直に意柔輭けく
即ち斯は語るなり
自から身命おしまねば
唯方便の力にて
俱に靈鷲の山に出で
餘國に在りて人々が
常に滅せず此に在り
我また彼らの中にして
滅と不滅と現ずなれ
恭敬信樂する者は
無上の法を說ぬべし

汝ら此を聞ずして
我は衆ての衆生が
爲に此身を現はさで
一心に戀ひて慕ふれば

但我滅度すとおもふ
苦海に沒在する故に
渴仰心を生ぜしむ
乃はち出て法を說く

靈山淨土

我が神通の力にて
常に靈鷲の山及び
衆生の劫は盡果て、
我此の土は安穩けく
園林および堂閣は
金の樹は花果多く

今より無央數劫に
所餘の諸の住處にも
大火に燒ると見る時も
天人常に充滿し
種々の寶に莊嚴し
衆生の遊樂する處

諸天は天の鼓うち
曼陀羅の花を雨ふらし
衆の伎樂を作しては
佛と大衆に散すなり

釋尊の本懷

如來無盡の大悲より
釋迦牟尼佛と現はれて
世の群萌を拯はんと
正しく出世本懷の
世尊大事の因緣は
分子れし本具佛性を
形氣に受たる煩惱を
智德を併べ備へては
三界の子を矜れみて
光く道教を聞きまし
餘の方便を擲をきて
彌陀の法を演たまふ
衆生本有の法身より
開きて清きに悟らしめ
靈化し菩提の德とはし
眞の佛子と爲むが爲め

衆生無始く無明は
彌陀の常に照す日の
即ち菩薩の階位にて
淨滿月は正覺の
闇に迷ふは凡夫にて
圓かに照して滿ぬるは

恰かも闇き月の如と
映ずる影の缺盈は
新月進みて十五なる
佛位に登りし姿なり
菩薩は分に光を得
即ち佛陀の覺なり

聖意の現はれ

聖なる聖名を稱てば
如來の無上恩寵を
如來の神聖なる聖意
如來の正義なる聖意

聖意の現はれ仰ぐなり
我らが感情に滿しめよ
我らが良心を照しませ
我らが意志に現はれよ

至眞にしていと聖き
至善にしていと聖き
至美にしていと聖き
我をすべての同胞と

靈國をこゝに格れかし
靈國をこゝに格れかし
靈國をこゝに格れかし
安き靈許に在らしめよ

佛々相念の讃

本有常住法身の
威神の光明永しへに
無明に迷ふ子らが爲
釋迦牟尼佛と現れて
譬へば西に日は入も
無量壽王の日光は

無量光王大日輪
十方世界を照しては
方便不思議の力より
如來の慈悲を示します
光は月に映る如と
牟尼滿月に輝やけり

釋尊出世の本懐を
即ち世尊は寂靜に
本佛彌陀の靈光は
爾時諸根悅豫し
光き顏は巍々として
影が表裏に暢る如と

同

如來淸淨光　明は
諸根は最も淸らけく
如來歡喜の光明は
諸佛の常に住ませる

二

靈鷲の嘉會に示さんと
彌陀三昧に入たまふ
人佛牟尼に映ろひて
姿色も殊に淸らけし
譬へば明淨なる鏡
威容の光極みなし

世尊の威覺に映ろへば
奇特なること極みなし
世雄の聖情に融合し
大我の中に安住す

如來智慧の光明は
世間の闇を照しては
如來不斷の光明は
至高德に在まして
如來萬德具備りて
三輪完全の鑑とし
人佛牟尼は一向に
本佛彌陀の靈德は
入我我入は神秘にて
甚深不思議の感應は
願はくは我同胞と
念佛三昧を宗として

世眼の智慧と現はれて
如實に衆生を導びきぬ
世英の聖意に實現し
最勝道に住しける
天尊の身に現じては
衆生に軌を垂れ給ふ
本佛彌陀を憶念し
牟尼の身意に顯現す
三密正に冥合し
是れ斯教の秘奥なり
世尊の範に隨順し
光の中に生活さなん

佛智の靈國

釋尊自から見給へる
便ち阿難に敎へては
時に彌陀無上尊
光明遍ねく十方の
大小諸山一切の
譬へば劫水彌滿して
一切菩薩聖賢の
彌陀光王の光明は
彼の清淨の國土なる
自然微妙の莊嚴は

佛智の境を明さんと
阿彌陀世尊を禮せしむ
萬德圓滿し玉ひて
諸佛の世界を照します
物皆な同じ色となり
滉瀁浩汗たる如し
光はすべて隱蔽し
超然として顯かりき
地より乃至虛空まで
佛智不思議の所現なり

彌陀正覺の大音は
光明名號の靈靈力は
六道種々の垢穢なるは
淨土微妙の莊嚴は
佛の淨土の中ながら
衆生の認むる穢土の中
彼土に胎化の二生あり
罪福因果を信ずるも
若し人佛智を信解して
七寶華中に化生して

十方世界に響流せり
衆生を攝化し給へり
衆生業識の所感にて
佛智の所現と說玉ふ
衆生は娑婆と感ずなれ
佛は淨土を觀給へり
佛智を了解せぬ人は
彼宮殿に胎生す
聖意に隨順する時は
智慧と功德を具足せん

聖　種

ほとけのみなをたねとして　めぐみのひかりにてらされて
あふぐこゝろのはなひらき　またなきさとりのみとならむ

よろこびのひかり

いろはにほへどちりぬるを　もゝもさくらもひとさかり
げにあだしよのはかなさは　つねなるものぞなかりけり
ひとたびひらきてとことはに　かはらでにほふはよろこびの
ひかりによりてさきにける　ひとのこゝろのはなならめ

三身の聖歌

法身の讃 一

仰ぐも畏こき阿彌陀尊　三身一如の　法の身は
摩訶毘盧遮那と號ては　一切の本初に在ませり
六大無礙なる　靈體は　萬德法爾とそなはりて
遍ねく時空に亘りては　永恒に自づと在ませり
世々のあらゆる諸佛と　天地よろづの　神祇と
乃し生とし　活く物の　大御親にて　最と尊し
されば一切の　諸佛も　有ゆる三世の　聖等も
如來不思議の　靈德を　咸な悉く　讃めまつる

毘盧は宇宙の王に在し
天地萬ろづの物をみな
一切て智慧と　能との
卽ち因果の　律として
あまつみ空に列なりし
地に生しげる草も木も
朝日眩ゆくかゞやくも
射通る星のひかりをも

三

三界はすべて我が有ぞ
卽ち我子とのたまへる
天地萬づのものをもて
一切萬法の則として
統攝ますなり畏こくも
秩序正しく爲しますも
世界の衆生を生成せり
數へず星のめぐれるも
天則に係らぬ物ぞなき
冴やかに照らす月の影
法身の光榮を現はせり

生とし活ける物はみな
佛は我等が　父　なり
恁くは至大に設備ては

われら衆生を惠みます
明きひかりに新らしき
われらが命を賜ひます
我等は法身に受けける
攝化のひかり被むりて

聖旨の程ぞたふとけれ
糧と清けき　澄氣もて
ミオヤの恩寵いと深し
靈性　本自　具ふれば
聖旨に契ふ子とならん

報身の讃

一

本有　法身　阿彌陀尊
本覺眞如のみやこより
一子の慈悲の割なくも
何成る苦毒を受るとも

無明に迷ふ子らがため
法藏菩薩の　迹を垂れ
苦海の衆生を救はんに
忍んでつひに悔じとの

無量の願行　成就して
本迹不二なる　靈體を
無量光土にましまして
世界を照して　念佛の
衆生　至心に　信樂し
恩寵のひかりを蒙りて
光に遇はゞ　罪も消え
身心ともに　安らけく
信心　眞に　得る人は
聖旨に契ふ子となれば
いよ〳〵命の終りには
慈悲の面影觀まつりて

卽ち十劫覺と現り給ふ
無碍光王と名づくなり
光明　遍ねく　十方の
衆生を攝取したまへり
佛の慈悲を　念ずれば
便はち信心なりぬべし
歡喜きはなく覺ほへて
淸きこゝろに蘇がへる
有漏の依身は變らねど
法子の天職務むなり
一切の障碍盡きはてゝ
聖き御もとに到るなり

二

清き啓示を　被むりて
報佛不思議の　境なる
雲にそびゆる　宮殿は
瑠璃　寶石の　莊嚴の
寶の池には　水澄みて
七重のうゑきに網覆ひ
寶の蓮華は地に滿ちて
ひかりに化佛現はれて
阿彌陀　無量　光王尊
相好圓滿　したまひて
無數の菩薩は法の身に

こゝろの知見開くれば
花藏世界はあらはるれ
金　銀　摩尼　眞珠
照り輝くこと極みなし
金の砂は　照り徹ふる
花と果は　かゞやけり
無量の色にひかりあり
微妙の法を說きたまふ
身色　金山王の　如と
威神のひかり極みなし
智慧と功德と備はりて

如來を繞りし　裝ひは
世尊大衆のなかにして
清風寶樹を吹きぬれば
あまつ乙女は雲を分け
妙なる花をあめふらし

雲の月を　かこむごと
妙法を說きて已るとき
百千の樂を作すがごと
天の伎樂をならしては
佛と大衆にちらすなり

應身の讃

舍那圓滿の　阿彌陀尊
八相應化の　迹を垂れ
先づ出初めし雲居なる
天地よろづの　民草に
地に出てはカピラエの

靈を忍土にわかちては
釋迦牟尼佛と號けます
兜史陀の內の宮居には
めぐみの露を濕ほしぬ
淨飯王を　父とはし

時を選みてたましひを
うづき八日の長閑さに
降誕ます聖子の初聲は
一切の善事遂ぐるてふ
囲かにそなふる相好は
學の園生にのぞみては
技藝の林にあそびては
四門の遊びに仇し世の
天の　下を　統治めす
人の倫とて　妹と脊の
最と睦まじき閨の門に
上なき道の得ま欲しく

摩耶の母胎に降します
ラビの園生の花のもと
天と地とに　響きしと
悉達多君とは名けらる
梵仙阿私陀を感かしゝ
五明四吠陀の花をめで
奥義の室に入るとかや
常なき相をさとりては
上なき位も避けたまひ
契り染ける耶輸陀羅と
王子の羅喉羅を擧かど
ささらぎ八日の　曉に

乾陟馬王に御されては
深山の叢を分け入りて
みづから鬚髪を除ては
千里の霞を踏みのぼり
解脱の道を訊ひしかど
尼連禪河のほとりなる
具さに苦行を積りては
こがねの流に浴みては
献ぐる乳を受けまして
伽耶の毘鉢羅の樹下に
むすぶ跏趺いかめしく
天つ魔羅が吹きおこす

ひそかに宮を出ましぬ
たまの餝をぬきすてつ
法の衣に　替へたまふ
アラヽウドラの仙人に
意を得さで立ち去りぬ
緑の草しくそのふにて
六度の春を經にけらし
サイナの女ナダバラが
頓に氣力をよみがへし
金剛座の　こけむしろ
三昧の床に曳きしめぬ
百のいかづちむら雲も

青天冴かに照りわたる
臘月八日のあかつきに
無明生死のゆめさめて
佛陀のおしへは正覺の
牟尼の法は　涅槃なる
世を度ふこと五十年に
應化の迹は狗尸那なる
まことは久遠　實成の
常恒に樂しき御國にて
願はくは我が　同胞よ
聖旨に什ふ身と爲りて

月には障りあらざりし
明星仄かに出しとき
無上正覺を得たまへり
無量の光をさとらしめ
無量壽國にかへるなり
三輪まどかの範を垂れ
鶴の林に　かくれしも
無量壽佛にましませば
光明攝化のきはみなし
恩寵のひかりに更生り
安き御許にいたらなん

一心十界の頌

一大精神

天地よろづの物はみな　法身如來藏性の
發現なりと識るときは　人の心性根底ぞ深し

一心十界

たとへば巧な畫き師が　さま〳〵すがたを繪す如く
六凡四聖とかはれども　ひとつ心や造るなれ

地獄

地獄は倒に懸りてぞ　たけき炎に焦るゝは
人道に逆ひ理に戻り　殘酷非道の報ひとや

餓鬼

有財無財の餓鬼てふは
たからと五慾ゑ貧りて
肉慾我慾の悪弊症にて
重き罪悪造るなり

畜生

形は人類に似たれども
正なる人道を横さまに
情操は禽かは獣かは
歩行衛はいづこぞや

修羅

おのれ慢ぶり他を威し
天を畏れず世をなみし
僞善僞德に名を街ひ
驕る阿修羅のかほにくし

人間

仁義禮智のみちありて
義務は國家の目的にとて
社交は互ひに恕やり
力ゑ竭すは人なれや

博く愛して人類の爲　我を犧牲に献げてぞ
世に幸福を與ふるは　國つ神かや天人か

聲　聞

小聖は四諦の理を觀じ　無我は宇宙を身となせば
神通自づと具はりて　無爲の都に栖あそぶ

緣　覺

獨りしづかに座を占て　因緣無生の理をさとり
無明生死の夢さめて　緣覺涅槃に入ぬらめ

菩　薩

ぼさつは誓の海ふかく　菩提を求め衆生を度し
一切衆生を我身とす　同體大悲の極みなれ

佛　陀

佛陀は三身まどかにて
智悲やあまねく照しては
法身在さぬ處もなく
八相應化のあと高し

勸　結

無明は六のやみぢなり
九界にかゝる雲はれて
佛法を外な求めぞよ
宇宙一大眞我なる
如來の智光に無明さめて
事相は內容かぎりなき
斯る眞理を得てよりは
最終眞理の目的に
覺醒れば一如の天淸く
本覺如來の日は明し
己がこゝろの源の
無量光壽に歸命せば
天眞自性は顯はれ
萬の功德は與へらる
大我の中の我として
參はり天職を力めかし

假のやど

此世はげにも樂しける、
花よ月よとながめては、
いつの間にやらうつりゆく、
此世はしばしかりのやど、
さりとはしらでうか〳〵と、
人は此世に生れ來し、
かりの我身と云ひながら、
かたく認めて大方は、
能く思ひ見よ世の中は、
必ず人に返すなり、

我世とばかり思ひつつ、
あつきさむきとかたりしも、
我身のほどぞはかなしな、
いつまでこゝに在りぬべき、
あだにくらせるあはれさよ、
何ぞ目的と覺ほへず、
心は永に我物と、
まことにさとりし人もなし、
人にかりたる品物は、
天地に借りたる物ならば、

もとの天地に返すべき、
今我この身は誰よりか、
四肢五官をはじめとし、
天地自然の五大なる、
かりたる物にて有りしかば、
自然の規定をしる時は、
まして此身につきそひし、
愚なる身のかなしさは、
しり顔にしてしらぬかな、
朽ちはてぬべき身と財に、
心をなやめ身をいため、
金は山とつもりても、

自然の道理はあるものぞ、
かりたる物としるやいな、
五臓六腑ことゞく、
地水火風空よりも、
必ずもとに返すべき、
身も我物にあらざれば、
すべての所有に於てをや、
我身はしばしかりの身と、
我慾に目のなき輩は、
飽くこともなく貪ぼりて
命をまでもちゞめては、
財はくらに滿るとも、

つひに此身の終りには、
全く我身と思ひたる、
斯場に臨んでいかばかり、
我につきそふ物はたゞ、
業の薪木をつもりける、

つき隨ふもの一もなし、
身をさへもとの土くれに、
悲しみ悔むも甲斐やある、
一生つくりし罪により、
獄火の外になかるべし。

自業自得

我慾に目しひし輩は、
自ら造りて我と受く、
たま〳〵病にかゝりなば、
また災禍にあふ時は、
己が因果をかへりみず、

因緣因果の理にくらく、
自業自得とさとりえず、
神や佛の加持祈禱、
星除方角除などと、
かなしい時の神だのみ、

まことの神やみほとけは、
石についても死なじとて、
むごき無常の殺鬼めは、
はげしき業風吹き來り、
奪ふて地獄の火の中に、
苦しみなやみていつの世も、

眞理の光りましませば、
いかに意氣地を張りかむも、
慈悲もなさけもあらざれば、
あらいたはしやたましひを、
投じられては千萬年、
浮ぶ瀨もなきあはれさよ、

釋尊出世

無明のやみのいとふかく、
苦界の衆生を憐みて、
三千界にたゞひとり、
はなちて此世を照します、

流轉生死の極みなき、
救の道を敎へます、
三世了達のみひかりを、
釋迦牟尼如來出で給ひ、

八相成佛示現して、
たゞみほとけの教のみ、
衆生濟度きはみなく、
永恒不動の眞理なり。

大みおやの慈悲

法身あみだ如來こそ、
世界一切の萬有は、
衆生の身心こと〴〵く、
天地よろづの物をもて、
我ら衆生は法身の、
無明のやみにさまよひて、
子の苦をあはれむ親心、
方便法身を示しては、
天地萬物のミオヤなり、
みてにかゝらぬ物ぞなし、
みなみほとけの分子にて、
我らをはぐみ給ふなり、
み子にはあれど始もなき、
生死に流轉きはなきを、
慈悲のみむねのやる瀨なく、
法藏ぼさつとへりくだり、

いかに迷の我子をば、
五劫に思をこらしては、
功をつもり德をうえて、
六八のちかひは悉く、
今は本願成就して、
極樂淨土を莊嚴し、
尊體無量の相好に、
世界を照して念佛の、
我ら無始よりさまよひて、
みおやのなさけふかければ、
一向みむねにしたがはゞ、

救ふてだてを得まほしく、
無量永劫難行の、
大悲の誓願建てたまひ、
衆生の爲と聞えける、
十方淨土に超れたる、
萬善萬美をつくしては、
光明遍く十方の、
衆生を攝取し給へり、
生死の海に沈みしも、
むかしの罪を懺悔して、
いかでか救はで置くべきぞ。

みおやのみもと

みだの淨土に生るれば、
光明とはに輝きて、
八功德池をながむれば、
金の砂はかゞやきて、
蓮の華は咲きにほひ、
四邊の階を下りては、
深淺おもひのまゝにして、
身心ともに淸らかに、
如來說法の會に入れば、
觀音勢至を始めとし、
無比の法味を享受して、
ぼさつの相好極みなく、
無量の功德そなはりて、
樂しさきはまりなかりけり、
七寶をもて莊嚴し、
すめる水にぞ照りとほり、
色光量りもしられざる、
水に游げるぼさつがた、
溫凉調和は身に適し、
樂しさいはんかたもなし、
みだの寶座のみもとにて、
無量のぼさつまかさつと、
ます〳〵佛道を增進し、
智慧神通もそなはりて、

みだ同體のさとり、
彼處は不老不死のさと、
みだ法王の樂園は、
一度みもとをまよひ出て、
生々世々のうけし苦も、
今度いかなる宿善に、
まねきの聲に驚きて、
慈悲のみもとに歸ること、
みおやのほかに子をすくふ、
子はたゞみおやにたよるより、
衆生濟度きはみなし、
四難八苦の名だになく、
元よりみおやのみやこなり、
六のちまたを經めぐりて、
自らしらで經にけるを、
もよふされてや大みおやの、
無始のまよひの夢さめて、
ひとへにみおやのちからなり、
佛も神もなかるらむ、
外にたのみのみちやある。

如來の光

仰ぐも畏こきあみだ尊
　乃し生とし活くものゝ
如來は法則の主に在て
　一切諸法の原則なれば
本願攝取ぬの夕日かげ
　幸福と光榮に輝やける
無量壽如來の法の身は
　聖旨の光を體得ひとは
四智圓かなる朝日かげ
　ひかりを被る撫し子の

一切の佛と神がみと
　大み本地にて獨尊とし
天地萬物を統べ攝さめ
　權能に係らぬ物ぞなし
歸依かたを照らしては
　涅槃のみ國に引接きぬ
眞理の父にましませば
　無上法王位を輔處なり
み法の庭にてりわたり
　菩提の花は開きそめむ

神聖と正義は嚴そかに
　恩寵の母の靈育みには
本覺の宮に入りぬれば
　無上覺王の寶座には
聖旨にそむける迷子が
　つみの薪木を積れるも
塵にまびれし稚な子が
　清き光りのみそゝぎに
天うらゝかに歡びの
　逍遙こゝろの樂しさに
さとき光に無明はれて
　月の聖容をみまつらば

臨める父の威儀たかく
　世嗣の聖子と成ぬらむ
絶對圓滿へだてなく
　威神の光まどかなり
惑と業となやみなる
　炎のひかりに焚けつきぬ
肉我の感覺は汚るれど
　五根淨とは成りぬべし
光りはれたるみ園にて
　ときはの春は長閑なり
智見の眼ひらくとき
　聖きみむねを悟らるれ

斷へぬ光に動機がされ
　ます〳〵至善に向上ては
永夜に眠れる迷ひ子が
　　難思の光りを感るにぞ
聖なる靈應に交感とき
　歡喜はなく覺ほへて
智悲の日月の照らす下
　　犧牲まつりし此身もて
　　光の生活
自性もとより淨らけし
　聖なる光りを感ぬれば
如來の慈悲いとふかく

己を清め他をさそひ
　　み子の天職を果すなり
召喚のみこゑに驚きて
　　靈のあけとは成ぬべし
神祕融合いとたへに
　聖きこゝろに更生へる
み子の數なる我われは
　　聖意に事へまつるなり

肉我の氣質ぞ汚すなれ
　聖きみむねも啓示れむ
我らが感情に融合時は

すべての惱も薄らぎて
光のうちの生活しには
きよき光をかうむれば
内には充てる智悲の德
圓かに備はる人格は
聖旨に背きてぬば玉や
千とせの獄もみ光りに
聖衆の稱へ
如來の眞理のみ光りは
神聖と正義の日は明く
よろづの德は圓かにて
一切の佛陀も聖等も

平和と歡喜の極みなく
身をも心もやすらけし
非靈氣質もきよめられ
面てはおのづと麗しく
聖意體現はす相なり
三の闇路におつる身の
忽ち明くは爲ぬべし
聖きが中にいときよく
智慧と慈悲の月淸し
照らさぬ隈も無かりせば
聖德を稱へぬ者ぞなき

光を穫る因

若ひと如來のみ光りの
日夜不斷て聖名を稱ひ
三昧に神をこらしつゝ
恩寵の光に感合てぞ
有餘の依身を捨ずして
いよゝ天分を果す日は
光を穫たる果

無爲泥洹のみやこには
金しろがねまに眞珠
舍那圓滿のみすがたは
無量のボサツ聖衆は

威神の功德を聞まつり
行住座臥憶念てぞ
聖旨の現はれ祈りなば
聖きこゝろに復活へり
樂しきそのに栖みあそび
眞實報土に入りぬべし

逍遙さ有無を離れにき
るり寶石のみや居なる
相好光明きはもなく
雲の月をかこむ如と

常樂我淨の靈そのには
　我らかしこに到るとき
因圓果滿のあしたには
　三身一如の理をさとり
願はくば我もろひとゝ
　聖き心をおこしては
幸福とさかえの花匂ふ
　聖衆同時にほめたゝふ
佛と平等くらゐにて
　十方度生ことはなけむ
同じく心光を被むりて
　やすきみ國に生れえむ

八相應化の頌

大恩教主釋迦牟尼佛
　常寂光土に在して
無明にまよふ子らがため
　靈應を忍土に分ちては
二身一如の法の身は
　萬物を統てをさめます
大悲三昧のちからより
　八相應化の跡をたれ

まづ出そめし雲井なる
　天地よろづの民くさに
地上に出てはカビラエの
　時をえらみてたましひを
四月八日ののどけさに
　降誕ます聖子の初聲は
よろづの善事遂てふ
　まどかに具ふる相好は
學の園にのぞみては
　伎藝の林に遊びては
天の下を統治めす
　四門の遊びにあだし世の

兜史陀の內の宮居には
　めぐみの露を濕しぬ
スドダナラージャを父とはし
　マヤの母胎に降します
ラビの園生の花の下
　天と地とにひゞきしと
シタルダ君とは名けらる
　梵仙アシダを感しゝ
五明四吠陀の花をめで
　奥義の室にぞ入とかや
上なき主位に在ませど
　常なき相を悟らるゝ

人倫とて妹とせの
　いとむつまじき閨門に
上なき道の得まほしく
　乾陟馬王に御されては
深山の雲を分入りて
　自からみぐしを除ては
千里のかすみをわけのぼり
　解脱の道を討しかど
ニレンゼン河の邊りなる
　具さに苦行をつもりては
金の流に浴みては
　献ぐる乳をうけしにぞ
ちぎり染にしヤソタラと
　王子のラゴラを擧しかど
二月七日の後夜に
　密かに宮を出ましぬ」
玉のかざりをぬぎ捨つ
　法の衣に着しかふる
アラ、ウドラの仙人に
　意をえまさで立さりぬ
綠の草しく園生にて
　六たびの春を經にけらし
サイナの女ナタバラが
　頓に氣力を回復し

ガヤのヒバラの樹の下に
結ぶ跏趺おごそかに
天魔羅がふき起す
みそらさやかに照わたる
臘月八日の後夜の天
無明生死の夢さめて
無爲涅槃の天清き
慧日の光りはあきらけく
佛陀の教は上もなき
ムニの法はいと靈き
世を救ふこと五十年に
應化の迹はクシナなる

金剛座のこけむしろ
三まやの床にひきしめぬ
百のいかつち群雲も
月にはさはりあらざりし
明星ほのかに出し時
靈の曉日とは成にける」
常住の國は開けにき
うき世の闇を照すなり
等正覺をさとらしむ
ネハンの都に到るなれ
三輪完全の範をたれ
鶴の林にかくれしも

まことは久遠實成の
　常に樂しきみ園にて
ルリ寶石の寶殿に
　相好光明極みなく
衆生如來を見欲く
　聖きみ名を崇ては
三昧に神を凝なば
　聖き靈に更生り

無量光壽に在せば
　金銀マニ寶珠
菩薩聖衆に圍れて
　利益衆生の邊なし」
欽慕心の深ければ
　聖旨の現れ祈りつゝ
早晩か無明の雲はれて
　三身一如の月をみん

如來光明讃の頌

無　量　光（體大）

歸命無量光尊　一身乃至十佛身

獨尊統攝歸趣にまし
物心無礙超時空
内に無盡の德を具し
生産門には法身の
因緣因果の律として
攝取門には報應の
衆生を攝取し教化して

偏依の依なる圓實性
萬物内存心靈態
自然心靈界を爲す
一切知能は天則の
世界と衆生を生成す
二身を現じて十方の
菩提涅槃に歸趣せしむ

無邊光（相大）

絶對觀より主客爲し
十方三世の色心は
一大理系の枝葉なる

個體は衆生の阿賴耶なり
如來の鏡智に炳現す
個性の自治を末那とはす

如來は全てを自我として
體用相即相入の
重々無盡の交渉に
五識五塵は業識の
佛慧の勝妙五塵をば
平等性智にて統る
識智は一即一切の
知見を與ふは妙智なり
衆生の所感は異なれど
成所作智の作用なり

無礙光（用大）

法身一切智と能の
萬物を攝めて養ふと
報身無礙の光明は
本願不思議の力にて
神聖無上の命令は
大道自然に行はれ
天命天惠とは云はめ
十方攝化の聖意なる
衆生を解脱し自由とす
道德律の光にて

正義は撰善捨惡にて
恩寵は三緣の慈悲をもて
斯の三德の靈力にて
至善に向ひて進ましむ
聖子等の靈を育みます
便はち佛道成せしむ

無　對　光（衆生成佛）

聖意に背きて顚倒の
攝取同化の終局には
無對は如來の自境界
十佛三身具はりて
極樂無爲涅槃城
同體異名は智と情と
絕對無比の妙境は
衆生は闇に惑ひしも
彼此を絕して無對とす
始本不二の覺位にて
亦身心土不二と爲る
寂光華藏密嚴土
譬喩と密語に號くなり
便はち諸佛の住所にて

無住涅槃に在まして　常恒度生は自然なり

燄王光（除一切障）

燄王光の靈能は　一切の惑障除くなり
理惑は無明と十見と　塵沙の理智を障る性
事惑は生理と本能の　衆生俱生の垢質なり
亦は病的惡弊症　團體瘴氣は同共罪
行不は衆生の性格を　三聚に類を分つべし
聖意に背くは邪定にて　天然非靈は不定なり
聖意に協ふ心靈は　正定聚の員に入り
二惑の雲霧はれぬれば　理事の靈性顯はるれ

清　淨　光（感覺美化）

我等が五根は塵境に
感覺欲は亢進し
清淨光に浴すれば
內に靈光感じなば
此身は塵に交るも
五妙感なる靈境に
五根に各五位ありて
法慧佛とは靈界の

まびれて常に汚さるゝ
習慣つひに病爲す
根識清く滌がるゝ
姿色も自づと潤ほるれ
神は清き光にて
逍遙として栖遊ぶ
肉と天とは自然界
勝妙五塵を感ずなれ

歡　喜　光（感情融化）

有爲の世に處し幸福を
世は內外に苦惱と
解脫は己が任ならず
神祕融合最妙に
眞實勝妙樂を得て
人天自然の歡樂と
菩薩の他受法樂と
如來歡喜の光明が

求めば八苦身に逼る
罪と咎とに充滿てり
如來の大我に歸命せば
恩寵の中に安住す
法喜禪悅極みなく
二乘の眞空無爲の樂
佛陀の自受法樂は
隨類受用に外ならじ

智慧光（佛知見開悟）

聖旨に背きて無明となり
識知爭でか絕對の

妄想顚倒なる物の
如來の妙境測りえん

如來の知見被むれば　依正二報の莊嚴相
智慧內包の聖德と　法身理想の相を觀ん
三昧智慧陀羅尼等　一切の佛法悟らるれ
人の常識學習智　天才自然の發明智
二乘出世の眞空智　菩薩の道種智等より
唯佛與佛の種智まで　皆智慧光の所現なり

不斷光（意志靈化）

世界動機と主我の意は　六道輪廻の業を爲す
斯光は衆生を正善に　靈化し菩提に進ましむ
如來の三德加はれば　自づと廢惡進善し
無上の道心發しなば　願作佛と度生心

聖き意に靈化して　普賢の願行成就せん
道德五重の動機あり　人天二道の德よりも
二乘の自利菩薩利他　佛陀無上の道德は
如來の阿耨菩提なる　不斷の光に緣れば なり

難思光（喚起位）

佛性宿因を素地と爲し　名號聖種の聞薰に
智識教化の勝緣と　思修に信念萠發す
至心信樂欲生は　召喚に報う子の心
恭敬無餘間長時(修)　正進排雜神足行
讀誦禮拜觀察と　稱名讃嘆供養との
五種正行の法をもて　靈を養ふ資糧とはす

渇仰熱誠いや昂く
恩寵喚起の時到り

信念五根に力を得
心靈覺醒れば信滿位

無稱光（開發位）

瞳れば自己の見と思の
三昧凝神に妄想と
開發に隨信隨法は
七覺三昧に花開き
神祕融合不思議にて
歡喜極なく覺ほへて
此時情操轉換し
聖子の數に入ぬれば

非惡の深きを自覺せん
業障重きに苦悶ゆなれ
如來の中に我を投じ
三種の知見示されん
入我々入の奥邃し
眞我の中に安住す
靈き我と更生へり
便はち靈格備はりぬ

超日月光（證現位）

智悲は靈界の日月にて
聖子を養ふ父母なり

作佛度生の願行に
菩提の心を長養す

內外兩魔の健鬪は
靈を琢磨く器にて

三德の光の照護にて
自律謝德の金剛心

已に靈果の熟すれば
聖種を有緣に分播し

聖意を弘く世に敷いて
衆靈養ふ大地なり

佛子佛心佛行の
果位は無上正覺の

同一無量光壽なる
涅槃の樂土に歸するなり

諸教の精要

諸教の大觀

歸命無量光明尊
常恒普遍の妙法と
我今流布せる教法と
聖意に應はしめん爲め
宗教種類多けれど
絶對至尊を認めては
主體の心に生と理と
客體觀も多容にて
分身十方三世佛
及び一切賢聖等
己が信解の說をのぶ
佛力加被を垂れ給へ
一切に通ずる定義あり
最終希望を滿たすにぞ
靈との三我に等あれば
敎を三階位に分つ

自然と超然圓具とは
自然に多神と一體と
自然の物素に神を認て
一體教には自然なる
自然元氣に稟けし身は
超然教に一神と
神は最高天に在し
天地萬物こと〳〵く
神に犯し〻祖の罪
神の示しの戒律をば
一切を憐む慈父の愛
信愛するもの無終なる

隨類應機の教なり
日月山河樹林等
生我の幸福を求むなり
宇宙全體神とはす
終に自然に歸るなり
一體教との二ッあり
自然界に超越す
神の聖意に造化らる〻
子孫は獄火に燒かるべし
守らば死後に救はれん
一子に罪を代らしむ
天に生る〻恭教なり

波羅門天は絶對に
冥きにさまよふ迷子は
天父に冥合する時は
彼に到らばことゝく
衆生の業感より成れる
報佛所感の淨界に
阿賴耶所變の衆生界
轉依の菩提涅槃をば
前は空間此處かしこ
すべて自然と靈界は
圓具は前の兩界を
一切に神性具ふれば

宇宙に超在したまへり
幻夢の生死に苦をぞ受く
超在界に歸入せん
永遠涅槃に歸するなれ
輪廻の苦界厭離して
生を欣ふは淨土門
生死は惑業より造る
三祇に期するは相家なり
後は時間に因と果の
超然として隔つなり
統合して神の中とはす
汎神教と名づくなり

萬有神と萬有に
宇宙全體神なれば
臺家は同居方便土
唯だ佛のみ法身が
衆生の心に三千の
三千在理を衆生とし
華嚴は全宇華藏界
法界緣起の萬法は
理事と事々とは無碍にして
念劫圓融自在にて
密家は六大毘盧の身が
萬有互に主伴爲し

統一超然神となり
衆生も神の分子なり
報土は業の所感にて
常寂光土にいますとぞ
世間相即圓融し
三千果成を佛陀とす
森羅萬象十佛身
融して相即相入し
主伴重々無盡なり
生佛因果同時なり
隨緣三千四法身
重々無碍に相關す

一大毘盧の分子たる
各自の曼荼開くれば
禪には三界唯一心
淨土と穢土の隔なく
斷つべき煩惱なきものを
厭ふ生死もあらざれば
是等は何れも高遠に
內觀理想に傾きて
斯教は汎神超在の
神は實在圓實性
展して相對世界性
因緣性より三展し

衆生は理智の大日佛
毘盧密嚴は顯はるれ
一切萬差是眞性
衆生と佛と二ツなし
菩提を證する要やある
欣ふ涅槃も更に無し
美妙を究め盡せども
客觀を疎ずる嫌あり
一體神を信認す
屬性一切智能より
十方三世に相關し
個々差別の衆生性

極小各部の伏能は
生物向上みて人類の
神は自性終局の
報應二身を示しては
遠求二心は神人の
光明攝化の終局は

全部と共に進行し
理靈の二性と自發せり
心靈界に攝せんと
歸趣の理性を顯はせり
因緣力の理法にて
本始不二とは成りぬべし

諸教の宗趣

宗とは神人交感の
趣とは救靈更生の
如來の中に我を投じ
開展靈化の功を成し

宗教心理の中心點
宗教倫理の終局なり
生佛合一するところ
光明中の人となる

自然教にて降神は
神の啓示を蒙りて
超然教には超絶の
聖旨を示され罪ほろび
念佛三昧宗と爲し
業事成辨功成りて
如來出世の因緣は
開示し悟入せしめては
一念三千三觀を
即凡見佛功成りて
華嚴三昧に法界の
見聞解行證入の

生我に靈を交感す
斯願滿足得らるなり
神の聖靈感じては
聖き人とは更生す
生佛感應する時は
往生淨土に定まりぬ
衆生に具する佛知見
佛の正道行せしむ
四種三昧に行道し
六即成は臺家なり
觀には理事の無碍を得て
三生覺位は華嚴とぞ

自心の曼荼三平等
理具と加持と顯得の
直に自心の性を見て
任運自在に解脱して
今は念佛三昧に
信念喚起開發し
聖旨を己が心とし
命のつとめを果しては
宗教種類多けれど
理感二性は能と所の
理性は形式動機にて
感性内容動機にて

三密體宗行と爲し
三生佛位は秘密宗
無相無念を宗とはし
自然作佛は禪那なり
己れを彌陀に投じては
心靈更生期するなり
光明中の人となり
眞實報土に歸るなれ
通じて二性に分つべし
二動の動機によればなり
先天自性を開くなり
後天恩寵を受くるとぞ

前は自性の天眞を
後は絶對我を投じ
今は二性を綜合し
恩寵に感性充されて
願はくば我同胞等
同じく聖意を體しては

聖きみくに

聖き啓示を被むりて
清きみ天は朗らかに
雲に聳ゆる高樓は
璃瑠寶石の莊嚴の

開悟し解脱を宗とせり
救靈の力を仰ぐなり
天眞自性を開きつゝ
開發靈化を期するなれ
一切と恩寵を被りて
共に安寧に到らなむ

三摩耶の窓し開くれば
常世のみ國現はれぬ
金銀まに眞珠
照り輝やくこと鶏みなく

七の寶の池見れば
金の沙はきらゝかに
寶の樹に玉の枝
みそのに遊ぶ樂みは
天つ乙女は雲を分け
ひゞける音の樂しさは
日々に六度の花の雨
きしの山吹宛がらに
三昧の筵に座を占て
烏瑟の絲は天にこい
金の相好妙にして
巍き威儀は嚴そかに

八の功德の水みてり
清める面にぞ照り徹る
金の花は咲にほふ
無爲の都の春ながし
奏づるしらべ妙にして
身のおき處も覺ほえじ
金の庭にぞふりつもる
何の色ぞとまがふらめ
仰ぎ奉つれば彌陀尊
五山の毫光かゞやける
月のみ顏は圓かなり
萬の德は滿みてり

菩薩は妙なる法身に
如來を繞りし裝ひは
無爲泥洹の境には
大悲心に薰じてぞ

おの〳〵威德備はりて
雲の月をかこむ如と
長閑さ有無を離れにき
分身利物の極なけむ

念佛七覺支

(一) 擇法覺支

彌陀の身色紫金にて
端正無比の相好を
總の雜念亂想をば
神を遷して念ずれば

圓光徹照したまへる
聖名を通して念ほへよ
排きて一向如來に
便はち三昧成ずべし

(二) 精進覺支

聲々御名を稱へては　慈悲の光を仰ぐべし
身心彌陀を稱念し　勇猛に勵み勉めかし
金剛石も磨きなば　日光反映するが如と
三摩耶に神を凝しなば　彌陀の光は輝かん

（三）喜覺支

偏へに佛を見まほしく　愛慕の情いと深く
身命惜まず念ずれば　即ち彌陀は現はれん
念々佛を念じなば　慈悲の光にもよふされ
靈きめぐみに融合うて　歡喜極なく覺ほゆれ

（四）輕安覺支

御名に精神はさそはれて　心念ます〳〵至微に入り
三昧純熟する時は　清朗にして不思議なり

我等が業障ふかき身も
身心あるを覺ほえで

慈悲の聖意にとけあうて
定中安きを感ずなれ

（五）定覺支

彌陀に心をうつせみの
三昧正受に入りぬれば
慈悲のみ顏を覩まつれば
入我我入の靈感に

もぬけ果たる聲きよく
神氣融液不思議なり
盡ての障礙も除こりぬ
聖き心によみがへる

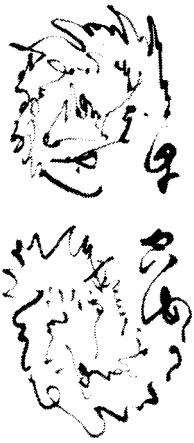
（六）拾覺支

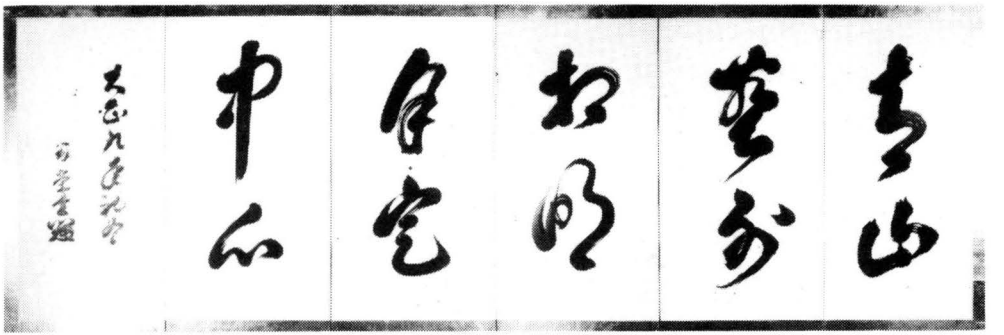
絕對無限の光明の
此處に居ながら宛がらに
夜な〳〵佛と共に寢ね
立居起臥添まして

中に安住するときは
神は淨土に栖み遊ぶ
朝な〳〵も共に起き
須臾も離るゝことぞなき

（七）念覺支

聖寵に染みし我心　秋の梢のたぐひかも
聖旨の光に靈化せば　光榮あらはす身とぞなる
聖旨を意とするときは　八億四千の念々も
みな佛心とふさはしく　佛子の徳はそなはるれ




青山
綠水
白雲
明月
清風
中仙

辨榮聖者畧傳

編者謹誌

大ミオヤの無盡の大悲に催ほされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一擧一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康

上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を賴りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名し給ふ。建立寄附も一人一厘の結緣として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては卽座に追恩別行に入つて不臥念佛一百日に及び給ふ。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拜し、歸朝しては東西に巡敎し阿彌陀經圖繪を施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號を施してかりにも一聲稱名の緣を結び給ふこと實に無數、難化の有緣一人の爲にも數年方便して猶措かず、寺の禮遇を辭り態々下男室に夜を明して勸化の緣を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脫ぎ與へて如來の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如來の尊像敎化の御文に筆を

運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の緣に隨つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に滿ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越

の夜寒身に沁む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

仰ぎ惟れば內證甚深く外用亦廣大に、全分度生の無我の力が無作の精進に顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。